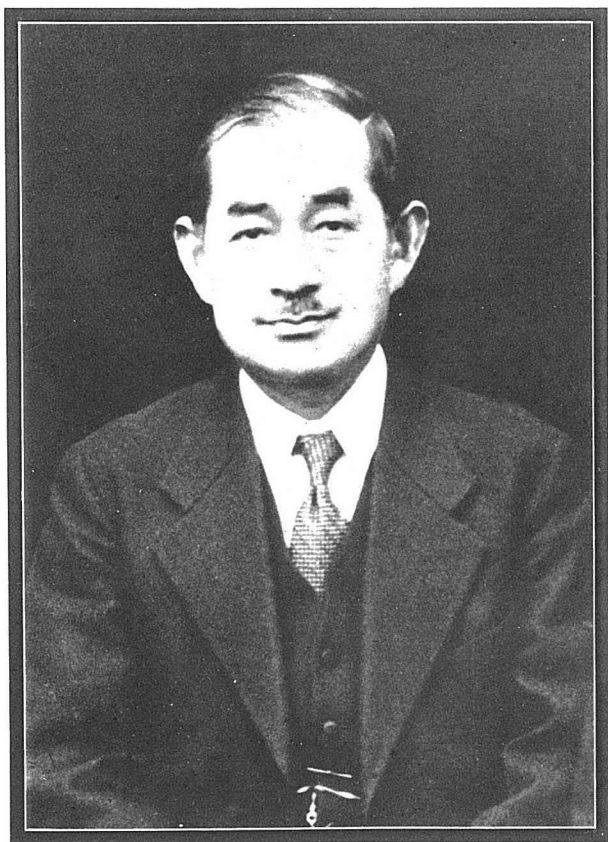


故本會評議員文學博士 時野谷常三郎先生肖像



特野谷平三郎

大臣人唐繪詞」とフリーア畫廊の地藏蘇起」とに關するもので我が繪卷物の畫史中兩者の占むべき位置や繪卷としての構成、氣格が問題とせられ、最後の二編では絢爛たる光悅の色紙と宗達、光琳の松島屏風とが論ぜられてゐる。

もとより著者は東洋美術研究に根幹となるべくして見逃すべからざる確實貴重な作品を正しく把握し之を傳へんとの意圖のもとに考證も又嚴正を期して多大の努力を拂はれてゐる。そして今かゝる希見の貴重な資料が公刊せられることによつて我々のもつ幸福は言ふに及ばず、又彼の「吉備大臣人唐繪詞」がアメリカに流出した際、彼我國交の緊張の折柄にもかゝらず彼の國土で人氣を集めた事實を聞く時、そこに我々は偉大なる藝術のもつ大いなる力と意義を思ふのである。されば今の時に於けるこの書の企ての意味にも思ひ及ぶ次第である。(座右暫刊行會發行・菊倍判・本文二五四頁・挿圖三八・別冊圖版五五・定價四拾圓) (岡田芳三郎)

彙報

本會評議員時野谷常三郎博士計

本會評議員文學博士時野谷常三郎氏は一昨年十二月華甲の壽を迎へられ、以後洛北北白川に悠々自適の生活を送つて居られたが昨年十二月二十一日午前九時溘然として長逝せられた。國家の前

途正に多事なる今日博士の如き學徳の士を失ふ事は痛惜の極みと云ふ可く、こゝに謹んで哀悼の意を表する次第である。尙、葬儀は二十四日、天寧寺に於て、多數の名士の參列裡に嚴肅に執り行はれた。

哀 辭

本會評議員文學博士時野谷常三郎君、寢疾詮損ヲ蒙ラズ、溘焉トシテ卒去セラル。寔ニ痛惜ノ情ニ堪ヘズ。君ガ昭和八年十一月以還、時ニ編纂主任トシテ、或ハ庶務會計主任トシテ、本會ノ發展ノ爲ニ盡瘁セラレタル功績ハ會員一同ノ深ク感佩鳴謝スル所、今日終焉ノ儀ノ舉ハルルニ當リ、薦垂焚香以テ深厚ナル哀悼ノ悃衷ヲ致シ、冥府ニ於ケル無邊ノ勝福ヲ獲ラレンコトヲ祈ル。

昭和十七年十二月二十四日

京都帝國大學文學部内

史學研究會

時野谷常三郎博士略歷

明治十四年十二月二十七日 出生
同 四十年七月十一日 東京帝國大學文科大學史學科卒業
同 年十月二十五日 任陸軍教授

叙高等官七等
十二級俸下賜

陸軍中央幼年學校附ヲ命ス

同 年十二月 十日 叙從七位
 同 四十四年十二月二十八日 陞叙高等官六等
 同 四十五年三月 一日 叙正七位
 大正 三年十二月二十二日 十一級俸下賜
 同 六年三月二十日 叙從六位
 同 六年六月二十六日 陞叙高等官五等
 同 八年四月七日 任奈良女子高等師範學校教授
 叙高等官五等
 八級俸下賜
 同 年十一月十八日 陞叙高等官四等
 叙正六位
 同 年十二月二十七日 叙勳六等瑞寶章
 同 九年八月三十日 叙勳六等瑞寶章
 同 十年六月九日 七級俸當分貳千五百拾圓下賜
 同 年十一月二十九日 陞叙高等官三等
 同 十一年一月二十日 叙從五位
 同 年三月三十一日 七級俸下賜
 同 十二年二月二十三日 兼任大阪高等學校教授
 叙高等官三等
 同 年十二月二十三日 六級俸下賜
 同 十三年九月二十七日 叙勳五等授瑞寶章
 同 十四年四月二十五日 免兼官
 同 年四月二十五日 八級俸下賜
 同 年五月十五日 兼任京都帝國大學助教

叙高等官三等
 文學部勤務ヲ命ス
 西洋史及歴史教授法研究ノ爲滿二
 年間獨逸國へ在留ヲ命ス
 同 年十一月十三日
 同 十五年三月二十一日 出發
 昭和 三年三月
 同 四年三月二十五日 史學地理學第三講座擔任ヲ命ス
 叙從四位
 同 五年五月二日
 同 年十一月六日 叙勳四等授瑞寶章
 同 八年五月十一日 任京都帝國大學教授
 叙高等官二等
 賜本俸五級俸
 文學部勤務ヲ命ス
 史學地理學第三講座擔任ヲ命ス
 授文學博士
 同 年五月二十二日
 同 十一年二月四日 叙勳三等授瑞寶章
 同 年六月一日 賜本俸四級俸
 同 十二年五月十五日 叙正四位
 同 年十月七日 京都帝國大學評議員ヲ命ス
 同 十三年七月一日 陞叙高等官一等
 同 年十二月六日 南洋群島へ出發ヲ命ス
 同 年十二月十日 出發
 同 十四年一月二十七日 歸學

同	年十月七日	依願京都帝國大學評議員ヲ免ス
同	十五年五月三十一日	賜木俸三級俸
同	年十一月十日	紀元二千六百年祝典記念章授與
同	十七年一月二十八日	賜木俸一級俸
同	年一月二十八日	依願免本官
同	年一月二十九日	職務勲劔ニ付爲其賞金四千圓給與
同	年二月二十日	叙從三位
		特旨ヲ以テ位一級被進

時野谷博士著作目錄

○單 行 本

バルカンの風雲(アカギ叢書)	〔書 名〕	〔發行年月〕	〔發行所〕
戦争と講和の歴史		大正 三、九	赤城正藏
最近世界史の大觀		三、十二	富 山 房
明治時代(日本文化史叢書)		十、十一	日黒書店
歐洲史蹟觀		十一、十一	大 鏡 閣
史籍解題下(西洋史講座)		昭和、五、六	目黒書店
第十八世紀史(西洋史講座)		七、三	雄 山 閣
現代の世界史(現代史學大系、第十四卷)		七、三	雄 山 閣
明治時代史(大日本史講座、第十卷)		九、四	共 立 社
新編中等西洋史(甲乙併用)		九、四	雄 山 閣
新編中等西洋史教授史料		九、十二	三 省 堂

國史精髓(現代篇)(歴史教育講座)	十、十	四海書房
明治時代(日本新文化史第十二卷)	十七、二	内外出版

○論 文

〔題 目〕	〔掲載雜誌書〕	〔發行年月〕
下野小山の亂	歴史地理	明治三八、三十一
タンネンベルヒの戰に就て	同	大正七、六
史上に現はれたるライン河	同	八、一
マールボロ公を中心とせる英國政界の推移	歴史と地理	九、五
アクバル大帝とジスイト教徒	同	九、七
北シレスウイヒに行へる獨逸の同化政策	同	十一、四
モンロー主義宣布當時に於ける歐洲諸國の外交	歴史地理	十二、四
フランス大革命と猶太人の解放	歴史と地理	十二、五
十八世紀に於ける英國の對印政策に現れたる革新思想(一、二)	史學雜誌	十二、六、七
ビスマルクの信仰と文化闘争	史 林	一四、一
印度に於ける聖トマス布教傳説の東西交通史上に及ぼせる影響	史學雜誌	昭和元、十二
一八六六年六月十二日埃佛密約に關する一考察	史 林	四、四

近代建國史

世界興亡史論 第十卷
五、九
ユーストの政治思想
史 林 六、十
明治初年に於ける日獨交渉の一斷
歴史と地理 七、一

普墮戰役當時ビスマルクの外交政策に及ぼせるプロシヤ後宮
の影響 史 林 七、十

ジュワイツ傭兵とルツェルン 歴史公論 八、三

アンボイナ虐殺事件に現はれた日本人 歴史と地理 八、八

ディアリツ密議の真相に就いて 史學雜誌 八、十

杉本學士への御挨拶(拙稿アンボイナ虐殺事件に現はれた日
本人に關して) 歴史と地理 八、十二

總説・フランス革命の原因・革命の勃發と進行 世界文化史大系 第十五卷 九、四

總説・ウィーン會議 同 第十六卷 九、十二

總説・ドイツ統一 同 第十七卷 十、十一

ポーランド、沿革と現状 世界地理風俗大系、波・獨・白・和篇 同 十、十二

「アルント漂浪記」の史料的价值 史 林 十一、一

英國側から見たフランス總裁政府のアイランド侵入 史 林 十二、四

「活歴」の歴史的意義

戦争と文化 同 十二、四・五・七
イギリスの印度經營(清代アジア) 同 十二、十一

世界文化史大系第十九卷 十三、九

ハルリー・フオン・アルニムの罪案とビスマルク 史學雜誌 十三、一〇

第一回日英同盟の成立とドイツ帝國 東西交涉史論 十四、五

オランダの南洋侵略について 歴史教育 十四、一〇

明治開化期の歴史思想 歴史理論の構成 十六、二

例會 十二月二十一日(月) 午後七時より樂友會館第一號室に
於て開催、折から東京より來講中の藤井講師を中心として左の如き研
究發表を聞き九時半散會した。出席者、西田教授以下二十名。

一、國學に就いて 三回生 梅溪 昇君

一、徵兵制御制定前後 藤井甚太郎氏

大會 例年秋季に開催する讀史會大會は種々の都合上延期中で
あつたが二月十三日(土) 午後一時より樂友會館講堂に於て開か
れ左記の研究發表があつて盛會裡に午後六時閉會した。

一、飛鳥奈良時代の塔基佛像に就いて 毛利 久氏

一、風土記に於ける國の觀念 横田 健一氏
一、驛鈴に關する一考察 和田 篤憲氏

一、中世地方生活の一課題

一、幕末の政治思想

一、北京のお正月

一、慶州皇龍寺九層塔に就いて

一、北畠顯家と奥羽經營

例會 三月四日(水) 午後六時半より樂友會館第六號室に於て

開催、出席者西田教授・藤助教、柴田講師以下三十名、左記の研究發表があり九時半閉會した。

一、密教史研究序説

一、室町時代の茶會に就いて

三回生 穂月 敬吾君

堀内他次郎氏

東洋史談話會

例會 一月二十日(水) 午後三時より樂友會館に於て開催。宮崎助教より左の講演を聴く。

現代東洋史の動向

當日、田村助教より以下學生並びに研究室、東方文化研究所の諸先輩約四十餘名の參集を得てすこぶる盛會であつた。

西洋史讀書會

例會 昭和十七年十二月十日(木) 午後六時より樂友會館にて開催。原教授、鈴木助教、岡島、井上、中山、前川の各講師を始め參會者二十一名。

一、ロシア農奴の解放について

二回生 川上 達雄君

地理學談話會

例會 昭和十七年十二月五日(土) 午後一時半より地理學實習室に於て開催。左記の演題にて最近イタリヤ留學より歸朝せられた角田文衛氏の談話を聞いた。第二次歐洲大戰下のイタリヤ並にドイツの國內情勢に關し、また一般歐洲情勢に關して、詳細に座談的に聴取することを得て出席者の感銘も特に深く、歸朝の途中經由せられた中東、シベリヤの狀況も、最近のことが判らない折柄のことにて興趣をひくこと多大なるものがあつた。當日出席者小牧教授をはじめ二十一名。

會報

◇會員動靜

◇入會

岡崎市六供 岡崎師範學校

大阪府高槻町字五百住

左京區淨土寺馬場町一五六 西村方

左京區田中樋之口町四八 春園方

左京區田中樋ノ口町四八 春園方

左京區淨土寺南田町九七 田中方

下京區下馬場鹽屋町 淺井龍躍方

小田 一郎氏

高谷 重夫氏

羅繼 祖氏

和中 一翁氏

小野木榮藏氏

加藤 一朝氏

慈 達雄氏

大阪市北區網島町三

左京區北白川上終町六九 澤井亨介方

左京區淨土寺馬場町十二 福井方

左京區吉田中大路内山三四 谷方

中京區西ノ京岡町五五 曾我方

左京區淨土寺真如町 喜運院内

左京區吉田中大路町三一ノ二七 近衛莊

左京區北白川西町 洛東アパート内

左京區北白川上終町六九 堀岡方

左京區北白川上池田町一九 松田方

左京區一乘寺堀ノ内町三 寺岡方

左京區淨土寺馬場町一三二 平和アパート

左京區淨土寺南田町一五六 如意通莊

左京區下鴨蓼倉町三九 杉田良美方

左京區北白川迫分町四 須田方

左京區鹿ヶ谷法然院町八四 阿武方

左京區北白川上池田町五〇 西川二三方

左京區岡崎東福ノ川町十番地 國枝彌一郎方

左京區田中高原町二七 秀潤舎内

府下乙訓郡新神足村 長岡禪塾内

上京區上立賣通寺町西入北横町

左京區吉田 三高自由寮

北條時次郎氏

森田 素材氏

佐藤 幸紀氏

山崎 榮氏

中野 繁雄氏

伊藤 慶道氏

大谷 浩三氏

栗林 健氏

九鬼 隆雄氏

海野 一隆氏

森 和幸氏

厚地 照彦氏

安藤秀四郎氏

水戸 丹二氏

赤澤 守正氏

槻 泰昌氏

水野 元氏

河合 一良氏

鈴木 博司氏

當麻 成志氏

渡邊武太郎氏

竹田 友三氏

下京區東九條下札辻町

◇轉 居

大阪市東區北濱四丁目一八

左京區下鴨泉川町二

◇死 去

時野谷常三郎氏、小山源治氏

謹んで哀悼の意を表します。

◇寄贈交換圖書

「天照大神の神學的研究」(補永茂助著)

「イギリス政治經濟史」(矢口孝次郎著)

「嬉喜門院集講解」(藤野勝彌著)

考古學雜誌 三二ノ一一、一二・三三ノ一

國民精神文化 八ノ一〇、一一・九ノ一

國民學院雜誌 四九ノ一一、一二

國語・國文 一二ノ二・一三ノ一、二

國史論纂 (大倉邦彦先生獻呈論文集)

史學雜誌 五三ノ一二、五四ノ一

史迹と美術 一三ノ一一、一二・二四ノ一

「神道思想史」(山田孝雄著)

人類學雜誌 五七ノ一二・五八ノ一

斯道文庫報 一二

宮本 茂氏

(右藤岡謙二郎氏紹介)

高村 正雄氏

樂千代三郎氏

明世堂書店

中央文化研究所

國民精神文化研究所

國民學院大學雜誌部

京都帝大國文學會

大倉精神文化研究所

史學會

史迹・美術同攻會

明世堂書店

日本人類學會

斯道文庫

(以上二十九名 外山軍治氏紹介)

- | | | |
|------------------|------------|----------|
| 社會學徒 | 一六ノ二・一七ノ一 | 社會學徒社 |
| 社會經濟史學 | 一二ノ八、九、一〇 | 社會經濟史學會 |
| 帝國學士院記事 | 一ノ三 | 帝國學士院 |
| 哲學研究 | 二八ノ二 | 京都哲學會 |
| 東洋史研究 | 七ノ五 | 東洋史研究會 |
| 「日本古文化序説」(大場磐雄著) | | 明世堂書店 |
| 長崎叢談 | 三一 | 長崎史談會 |
| 文 化 | 九ノ一、一〇ノ一 | 東北帝大文學會 |
| 滿 蒙 | 二四ノ一 | 滿 蒙 社 |
| 無 關 之 | 六七、六九 | むかしの會 |
| 蒙 古 | 九ノ一、一〇ノ一、二 | 善 隣 協 會 |
| 歷史學研究 | 一二ノ一、一三ノ一 | 歷史學研究會 |
| 歷史地理 | 八〇ノ六、八一ノ一 | 日本歷史地理學會 |
| 立命館大學論叢 | 一〇(歷史地理篇B) | 立命館出版部 |